

# 伊場遺跡出土木簡にみる七世紀の文書木簡利用

鐘 江 宏 之

## はじめに

律令制社会における文書取り扱いのさまざまな技術は、八世紀の大宝令制下から養老令制下にかけての時期に関しては、多くの史料が残り、さまざまな要素について検討することができる。筆者も、これまで八世紀以降の文書行政の様相について、いくつかの点を検討してきた。<sup>(1)</sup> 八世紀の文書については、正倉院文書や木簡などの史料から、文書を使ったさまざまな情報処理のあり方について、検討を加えることができる。唐における状況との比較についても、吐魯番や敦煌の出土文書と、日本の正倉院文書や出土文字資料を使って、書類の取り扱いにおける具体的な相違点などを見出すことができる。<sup>(2)</sup>

ところが、大宝令施行以前の七世紀となると、研究状況は一変する。八世紀では正倉院文書が残っているため、具体的な様相がわかったが、七世紀についてはこうした実物の紙の文書史料が残っていないため、残されている実物史料としては木簡に頼らざるを得ないのだが、木簡も決して多く残っているわけではない。残存状況は八世紀の木簡に

比べればるかに点数が少ない。このことは、もちろん、七世紀においては八世紀に比べて文書利用の普及の度合いがまだ低かったことを背景としてみるとみられる。もともと使われた書類の絶対量が少ないために、残ったもの量も少ないと考えられるのである。

このように、史料が少ない中ではあるが、七世紀の木簡に見られる文書の取り扱いの様相には、八世紀とは異なる特徴が見出される。年紀のあり方や文書の書式の点で、八世紀に広く見られる方式とは異なり、年号を使わず干支で年紀を扱ったり、<sup>(3)</sup>八世紀には解式で書かれる上申文書が、別な様式であるいわゆる前白様式で記されていたりするの<sup>(4)</sup>が、これまでもすでに明らかにされてきた点である。これらの特徴に関しては、大宝令施行以前には、朝鮮半島から日本列島に伝わった木簡を使う文化が基盤となつて、書類を作成する技術が展開しており、いわば朝鮮半島方式を基にした技術であつたといふことできそうである。それに対して、大宝令以降は、同時代の唐の方式を取り入れようとして、技術の基準を切り替えていったものと考えることができらう。

七世紀代の文書の扱いには、その時代性をとらえる上での独自の要素があると考えられ、<sup>(5)</sup>残された文書の少ない中でも、この点を追究することの意義は大きいと考える。こうした点で、七世紀代の木簡を積極的に利用した研究が進められなければならないが、まだ研究がそれほど進んではないのが現状であらう。本稿は、七世紀の木簡を利用して、こうした文書取り扱い技術に関して、いくつかの要素を読み取ろうと試みたものである。

中心として取り上げた木簡は、静岡県浜松市の伊場遺跡で出土している七世紀代であることが明らかなものに絞つた。地方における木簡から、七世紀の地方における文書技術のあり方を明らかにすることができれば、評の行政の現場が具体的にどのようなかを考える材料となり、八世紀における郡家で行われていることとの差異を考える材料ともなるであらうし、七世紀における行政制度の全国的な展開を見直す材料ともなると考える。七世紀から八世

紀にかけて整備されていく律令制に基づく行政機構の歴史的展開を考える上で、中央から伝播したと考えられる地方での技術が、七世紀後半の時期にはどの程度のものであったかを把握することが、七世紀の政治体制を評価し直す材料を提供するであろう。

### 一 第三号木簡と帳簿処理

伊場遺跡から見つかっている第三号木簡は、干支で年を記しており、また「五十戸」や「月生」の記載があることから、七世紀代のものと考えられる。まず、この木簡の釈文を掲げておく（釈文は『静岡県史』による）。

・<sup>(辛)</sup>□<sup>(辰)</sup>巳年正月生十日柴江五十戸人 若□□  
・□□□<sup>(辰)</sup>三百卅束若□部□□

(284) × 29 × 3

この木簡の冒頭の文字はおそらく「辛巳年」であり、天武天皇十年（六八一）をさす年紀とみられる。また、「五十戸」は全国で見つかっている七世紀後半の木簡では、天武天皇十二年（六八三）以降には「里」に切り替えられていく。<sup>(6)</sup> 浄御原令の部分的な先行的施行による表記の切り替えとする考え方がすでに<sup>(7)</sup>出されており、「五十戸」は「里」表記への切り替え以前の、地方行政組織の表記法である。月の朔日を表す「月生」の語も、七世紀代にはいくつか用例が知られているが、八世紀になると見られなくなる表記法である。<sup>(8)</sup>

内容は、天武天皇十年正月十日に、柴江五十戸の「若……」という人物が、三百三十束のものに何らかの関与をし



図1 伊場遺跡第3号木簡

たことを示している。七世紀から八世紀の文書において、束で数えられるものとしては、稲や野菜類が考えられるが、文書管理される情報としてやりとりのあるものとしては、稲の可能性のほうが高いだろう。

三百三十束という量は、もし稲の出挙に関わる束数だとすると、一人が一年で借り受けた量とは考えがたい。天平十一年（七三九）の備中国大税負死亡人帳を参考にとすると、出挙の一人あたりの分量は百八十四束までの範囲におさまっており、なおかつこの帳簿で束数の多い死亡者の場合には、数値の操作によって多量の負債とされた可能性があ

ることを考えると、実際の借り受け量が三百束に達することは、一戸単位程度の規模でないとあり得ないように思われる。したがって、この木簡に記された稲の束数は、一応、戸単位のものとして想定しておくことにしたい。

この木簡の書式は、干支年紀に始まる年月日記載の後に、稲のやりとりをした人名と稲の束数が記されている。年月日の後に、個人名と束数を記す書式は、七世紀の他の遺跡での事例も知られるようになった。書式の似たものとして、次に掲げる屋代遺跡群第一三号木簡を挙げることができる(図2参照)。

・ 戊戌年八月廿日 酒人部□荒馬□束酒人部□□□束

六部□□□□□部□人部大万呂

555×37×4

戊戌年は文武天皇二年(六九八)にあたり、七世紀末の木簡である。この木簡の場合には、複数名を挙げて、各人名ごとに束数が付記されている。廿束という数値は、一度の出挙の際に一人が借り受ける分量としては、問題のない数値である。一枚の木簡に、八月二日にあった稲のやりとりを、複数名分まとめて記したものとみることができる。複数名分の稲を合計すると、全体としては一〇〇束以上の数の情報になることも考えられる。八月廿日は、秋の収穫時期にあたっており、出挙稲の収納に関するものと解釈するのが穏当であろう。

このように、その日の稲のやりとりを日付を記した一枚の木簡に記録する方法が、大宝令施行よりも前の木簡の事例として、複数知られるようになってきた。一日の稲のやりとりが、この木簡の中に記された分のみと考える必要はなく、八月二〇日に別な複数名に関する木簡が作られたことも考えておいてよいだろう。収納の時期には、稲の返納がたくさんあり、木簡に書かれる情報も一枚で済むとは考えがたい。いずれにせよ、こうした木簡を使って、「一件



図2 屋代遺跡群第13号木簡（右）  
平城京第7号木簡（左）  
※平城京第7号木簡の写真は、奈良文化財研究所の提供による。

の記録」として残された単位情報が、後に一年分の情報をまとめて帳簿として整理される際のものとなっていくと考えられる。

伊場遺跡第三号木簡に関しては、その形態も注目される。報告書では長さ二八四ミリメートルで、上下端が完全に残ってはいないとされているが、写真版でみる限りは、上下ともにこの形のものとして加工された可能性がある。すなわち、もともとの形態で作られている完形品である可能性が考えられる。二八四ミリメートルという長さは、若

干短めではあるが天平尺の一尺の長さに近い。また、幅は二九ミリメートルで、こちらは一寸に相当する。長さ一尺、幅一寸の目安で作られた木簡なのではないだろうか。いわば規格品として、量産することを前提とした寸法であると考えられる。規格のそろったカード化された木簡として、一件一件の情報を記録したものが作成されていくのだろう。平川南氏は、出挙関連の木簡の規格性に着目したが、この木簡もそのような観点から注目してよいと思われる。

この木簡はさらに、下端部に近い場所に表面から裏面に貫通する孔があげられていることも注目される。この孔は複数の木簡を綴じるためのものと考えられ、同じ形態の木簡を複数綴じ合わせて使うことがあったことを示しているだろう。こうした綴じ方の類例としては、長屋王家木簡における伝票木簡の一群がある。伊場木簡が発見された時点では、長屋王邸宅跡はまだ発掘調査されていなかったために、伊場木簡におけるこうした孔はまだそれほど注目されてはいなかったが、長屋王家木簡が見つかり、その中における伝票木簡の利用の仕方の検討が進んだ現時点では、類似性を考慮に入れておくべきだろう。

長屋王家木簡においては、食料米を管理している部署で作成されたと考えられる木簡群が大量に見つかっており、食料支給に関わる伝票としての機能が考えられている。一例を挙げると、次のような様式である(図2参照)。

・ 竹野王子大許進米三升 受福横

六日百嶋

183×23×9 (平城京木簡第七号)

このような、支給対象者・支給量・日付・支給責任者といった情報を、一枚の木簡に記録し、孔をあけて綴じて管理していたとみられる。伝票木簡とみられる内容を持つものには、下端に近い場所か、もしくは上端に近い場所に表

面から裏面へ貫通する孔があげられており、この孔に紐を通して綴じたと考えられる。一枚一枚の木簡を情報カードのように使い、綴じ合わせてカード群からなる帳簿とし、これをさらに大型の平面を持つ木簡や紙を利用して別な帳簿に仕立てていくと考えられている。伊場木簡第三号も、ほぼ同様の位置に孔があいていることからすると、綴じ合わせて使われた可能性がある。

木簡を利用した書類の技術は、七世紀のうちに、ある方式のものがすでに広まっており、それを基盤として、大宝律令制が施行された後に新たな要素が加えられたり、別な方式で塗り替えていったりとみられる。長屋王家木簡は八世紀前半の靈龜・和銅年間のもものとみられ、伊場木簡第三号のほうが数十年先行している。しかも、地方社会において見られるのであるから、おそらく同様の手法は天武天皇一〇年（六八一）以前に中央で行われていたものが、地方でも取り入れられるようになったとみられる。長屋王家木簡の伝票木簡のような情報管理の方法が、天武天皇期には、中央はもちろん、地方社会でも行われるようになっていた可能性があるだろう。この伝票木簡のような方法は、大宝律令の導入を契機として取り入れられたものではない。それより前に、すでに取り入れられていたという点が、木簡利用の体系を考える上で、重要な点である。

## 二 第二二号木簡と照合のための利用

伊場遺跡出土の第二十一号木簡は、一一六・五センチメートルに及ぶ長大なもので、表裏にわたって記されている（図3・図4）。両面ともに数段にわたって記述が続き、各段では書き出しをそろえるなど、段組を意識した帳簿の様式といえることができる。<sup>⑤</sup> 釈文は図の脇に掲げた通りであるが、人名が列記され、各人名の下に「掠」（クラ）や「屋」



という文字が記され、その下に「一」や「二」が記されているという釈読がなされている。どちらの面が表でどちらが裏とは判断できないため、以下の考察では、仮にA面、B面として、それぞれの面を呼んでおくことにしたい。

この木簡の記され方については、まず、どちらの面も各段ごとに右から左へと人名が書かれていったとみてよいだろう。縦の行は段が異なるとそろってはおらず、段ごとにまとめて記されたとみられる。すなわち、Aの面の内容であれば、駅評人としては、語部三山、語部□古、軽部足石の三名が該当し、その次に加□□五十戸人が続けて列挙されていくというようになっている。

人名を列挙していく歴名様の記載は、右から左へという並べ方を原則にしているとみられる。

また、年代に関しては、「駅評人」「加□□五十戸人」という記載から考えることができる。「駅評」に関しては、「駅郷」とする見解も出されてはいたが、「五十戸」との関係からは、「駅評」として年代的に矛盾はなく、字画からそのままの釈読でよいと考える。「評」と記されていることから、大宝令施行よりも

図3 伊場遺跡第21号木簡（A面）

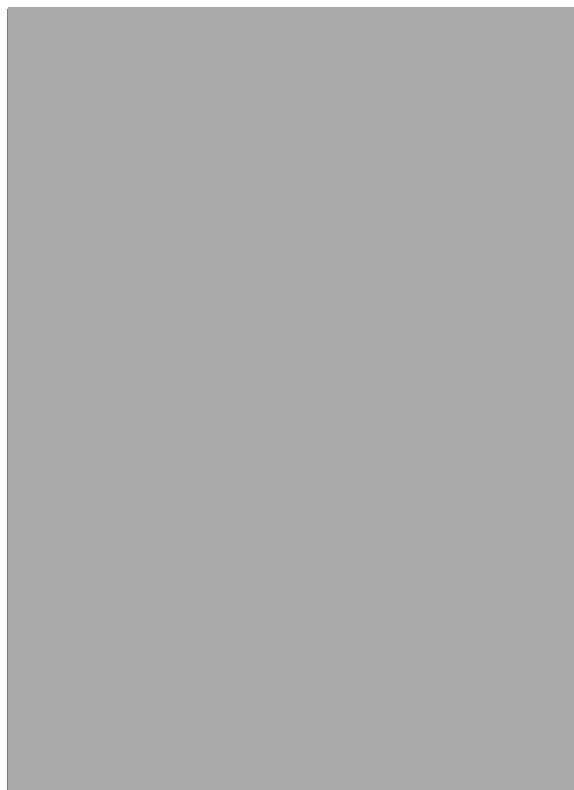


図4 伊場遺跡第21号木簡（B面）

「里」表記に統一されていくとみてよいだろう。この木簡の年代は、遅くとも六九〇年までのものと考えておいてよいだろう。

この木簡は、現在までの解釈としては、棕と屋を記載したものと考えられている。欠けている部分もあることから考えると、一郡規模に相当する量の情報量とみて、伊場遺跡の所在する敷智郡の棕と屋を書き上げたものとする見解が出されている。<sup>(17)</sup>ただし、こうした規模で「棕」（クラ）が一郡内に存在するののかという点には、やや疑問が持たれ

前とみられる。さらに、「五十戸」は近年出土している七世紀代の木簡の表記からすると、持統天皇元年（六八七）が下限である。<sup>(18)</sup>すでに、天武天皇十二年（六八三）から十四年（六八五）にかけて、「里」表記を取り入れた荷札木簡もあるが、天武天皇十二年から持統天皇元年の間、表記が並行していたとみれば、おおむねは、「五十戸」から「里」へという移行の過程にあり、持統天皇三年（六八九）の淨御原令施行以降、ないしは同四年（六九〇）に作成された庚寅年籍以降は、

る。個人名のあとに「棕二」とされている場合もあり、二棟も個人所有している可能性がないとはいえないが、むしろ個人持ちのクラを記したとは考えない見方も必要のように思われる。

B面の記載の中に、四段目の「目下部□木棕二今作」のほか、もう一つ現存の一段目の右から二人目にも「今□」という記述がある。「今作」は棕を現在造営中であると理解してよいだろうが、目下部□木は、棕を二棟造営中ということに解してよいのだろうか。個人が棕を一度に二棟造営するということは、考えにくいのではないだろうか。一棟は造営済みで、もう一棟が造営中だという見方もできるが、それならば、「今作」は棕一棟にかかる記述であるほうが望ましい。

この木簡の記載のあり方からすると、「棕二」と「今作」がともに「目下部□木」にかかっているとみたほうがよさそうである。すなわち、個人が「棕二」という情報に関わり、なおかつ個人が「今作」という情報に関わっている。こうした点からすると、棕や屋の所有を書き上げたのではなく、個人が「今作」のような作業に関わったことを記したものと考えたほうがふさわしいのではないだろうか。すなわち、ここに挙げられた人々が「棕」や「屋」の造営作業にどの程度従事したのかを書き上げたものという理解である。棕や屋が実際に何棟建ったのかは不明だが、造営に従事した延べ日数を個人ごとに書き上げたものではないだろうか。この木簡を記した時点の日に従事していた者については、「今作」と書かれているのだろう。

このような見方で考えると、この木簡は、支配下の人々を労働に駆り出した回数について書き上げた帳簿とみることができる。七世紀における地方での労働徴発とその管理についての、貴重な史料である可能性が見出される。現段階で、このような見方のできる史料が他にあまりなく、あくまで可能性を示すにとどめたいが、こうした見方からの内容の追究も必要ではないだろうか。



図5 伊場遺跡第21号木簡（A面）  
第2段部分（右）と第5段部分（左）

この木簡において、さらに注目したいのは、個人ごとの記載の末尾にある「一」「二」と釈読されている部分である。いずれのものも、右下がりに記されており（図5参照）、「一」「二」という文字を書いたとするには、疑問も持たれる。人名の字画を見ると、横画はおおむね水平に書かれており、この「一」「二」が右下がりであることから、漢字で「一」「二」と書いたものとは別趣旨であることも考えられる。この点で、他の遺跡から出土した木簡の類例を挙げるならば、屋代遺跡群出土の第一〇号木簡の記載が共通するのではないだろうか。

金刺部富止布手、  
刑部真□布、  
酒人□布手、  
金刺舎人真清布手、  
布手

(326) + (237) × (32) × 5

この木簡は、人名を記したあとに「布手」と記し、さらにその下に右下がりの点を付している。この右下がりの点

は、伊場遺跡第二一号木簡の「一」「二」よりも、傾きが大きい。ため、「一」とみることなく、釈読の段階ですでに合点として考えられている。「布手」が信濃特産の麻布の生産に関する労働を意味するものであれば、労働徴発のチェックの際の合点の可能性があるだろう。人名の下に労働の種類を書き、その下に合点を記すことでチェックしたという見方が出されているが<sup>18)</sup>、さらにこの見解を深めて考える必要がある。

屋代遺跡群第二〇号木簡では、人名＋「布手」＋右下がりの点 というひとまとまりの情報は、一気に書かれた

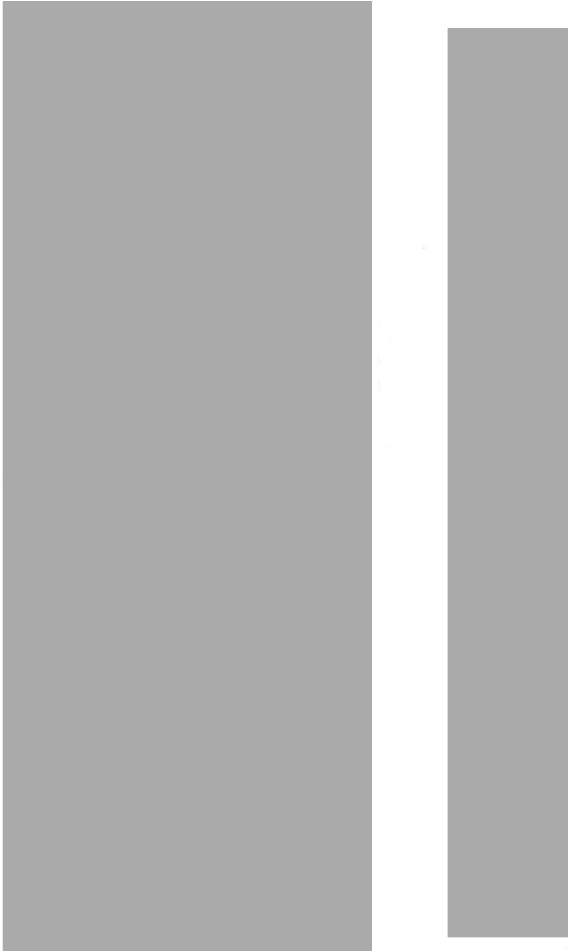


図6 屋代遺跡群第10号木簡  
全体（右）と2段目の部分（左）

ものだろう。つまり、あらかじめ「人名＋「布手」」という情報を記した木簡が用意されていて、それに作業現場でチェックがなされて「右下がりの点」が追記されたというわけではなさそうだとすることである。墨の濃淡は、墨痕の残り具合からでは判別がつかないため、あくまで記載のされ方から考えることになるが、木簡を記した段階で、「人名＋「布手」＋右下がりの点」という情報を複数名分にわたって、一気に書き上げたという見方ができる。この解釈に基づけば、「右下がりの点」は合点なのではなく、度数を示す記号とみるべきだろう。

伊場遺跡第二一号木簡の右下がりの「一」「二」も同様に考えられる余地がある。「椋」や「屋」について一度の労働を行ったか、二度の労働を行ったかという、度数を示した一本線もしくは二本線とみるべきではないだろうか。屋代遺跡群第一〇号木簡は、七世紀末から八世紀初頭の本簡を含む層位から出土している。七世紀代のものである可能性も考えられ、遅くとも八世紀初頭までのうちに年代観がおさまることは確実である。七世紀から行われていた文書利用の方法が八世紀初頭まで残ることは、先の伝票木簡のような事例から十分考えられ、この右下がりの記号も、伊場遺跡第二一号木簡と屋代遺跡群第一〇号木簡とで同様のものである可能性が高い。

七世紀から八世紀初頭にかけて（あるいは七世紀段階までのうちとみてもよいのだが）、人々の労働徴発などの記録の上で、人名を列記して書き上げていくという、同じような書式が広く使われていた可能性が見出される。大宝令施行以前の段階での文書記録の様式がうかがわれるだけでなく、労働徴発の管理のあり方を考察していく上での史料となる点が重要だろう。現時点で労働徴発に関わる点の理解を深めていく用意は不十分なため、その観点からの考察については今後の課題としたい。

## おわりに

本稿では、伊場遺跡出土の第三号木簡と第二一号木簡を主に扱いながら、八世紀の文書処理技術につながる要素の一部が、七世紀の地方社会ですでに確認されることを指摘してきた。大宝令の施行前と施行後では、文書の書式の点で大きな変化があり、断絶している部分も大きいですが、書類を使う技術としては、七世紀にすでに広まっているものを基盤として整備されてきた面も大きい。

本稿は、こうした点を具体的に検討する前提となる史料として、どのようなものを視野に入れることができるかという点で、一つの試論として組み立てたものであり、今後、七世紀における文書の利用のあり方を考えていくためのいくつかの論点を提起することができたと考える。史料が少ないために言及できなかった点は多いが、地方社会における文書利用を考える上では、個別の木簡の再検討をさらに進める必要があり、今後も同様の検討を進めたい。

## 註

- (1) 鐘江「計会帳に見える八世紀の文書伝達」『史学雑誌』一〇二二、一九九三年二月、鐘江「諸国正税帳の筆記と書生」『正倉院文書研究』七、吉川弘文館、二〇〇一年十一月、鐘江「律令行政と民衆への情報下達」『民衆史研究』六五、二〇〇三年五月など。
- (2) 鐘江「計会帳作成の背景」『正倉院文書研究』五、吉川弘文館、一九九七年十一月。
- (3) 岸俊男「木簡と大宝令」『木簡研究』二、一九八〇年十一月、のち岸『日本古代文物の研究』、塙書房、一九八八年一月。
- (4) 東野治之「木簡に現れた「某の前に申す」という形式の文書について」(東野『日本古代木簡の研究』、塙書房、一九八三年)

三月、早川庄八「公式様文書と文書木簡」『木簡研究』七、一九八五年二月、のち早川『日本古代の文書と典籍』、吉川弘文館、一九九七年五月。

(5) 鐘江宏之「七世紀の地方木簡」『木簡研究』二〇、一九九八年二月。

(6) 館野和己「律令制の成立と木簡」『木簡研究』二〇、一九九八年二月。

(7) 鬼頭清明「律令国家と農民」、塙書房、一九七九年九月。

(8) 東野治之「天智紀にみえる「月生」の語について」『万葉』八一、一九七三年六月、のち改稿し東野『正倉院文書と木簡の研究』、塙書房、一九七七年九月。

(9) 『大日本古文書』第二巻、二四七―二五二頁。

(10) 舟尾好正「出挙の実態に関する一考察」『史林』五六―五、一九七三年九月。

(11) 釈文は長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書五四 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書二八 更埴条里遺跡・屋代遺跡群―総論編―』(二〇〇〇年三月)における再調査の結果によるものを示している。

(12) 平川南「出土文字資料と正倉院文書」(石上英一・山口英男・加藤友康編『古代文書論』、東京大学出版会、一九九九年一月、のち改稿し平川『古代地方木簡の研究』、吉川弘文館、二〇〇三年二月)。

(13) 渡辺晃宏「長屋王家木簡と二つの家政機関」『奈良古代史論集』二、真陽社、一九九一年、渡辺晃宏「削屑からみた長屋王家木簡」『木簡研究』二二、一九九九年、館野和己「長屋王家の文書木簡に関する一考察」(奈良国立文化財研究所編『長屋王家・二条大路木簡を読む』吉川弘文館、二〇〇一年)。

(14) 鐘江宏之前掲註5論文。

(15) 鐘江宏之前掲註5論文。

(16) 奈良文化財研究所『評制下荷札木簡集成』(奈良文化財研究所史料第七十六冊、二〇〇六年三月)。

(17) 浜松市教育委員会『伊場木簡』(『伊場遺跡発掘調査報告書』一、一九七六年三月)。

(18) 財団法人長野県埋蔵文化財センター『長野県屋代遺跡群出土木簡』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書21、上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書23―更埴市内 その二―、一九九六年三月)。